

音楽療法におけるグリーフケア・生と死の教育

青海島通浦の鯨唄の現地調査から死と弔いの音楽アーキタイプについて

Grief Care and Death Education in Music Therapy

A perspective of Music Archetype of Death and grief/
mourning about whole-songs in Kayoi

2014年3月

稲葉 チカ

音楽療法におけるグリーフケア・生と死の教育

青海島通浦の鯨唄の現地調査から死と弔いの音楽アーキタイプについて

Grief Care and Death Education in Music Therapy

A Perspective of Music Archetype of Death and Grief/Mourning about
Whale-songs in Kayoi

稲葉 チカ

INABA Chika

死別、離別、愛着あるものの喪失、役割の喪失、自分自身の喪失などあらゆる喪失体験から生じる悲嘆の回復を援助するグリーフケアにおいて、音楽の療法的な効果や音楽手法についてまだ課題は多い。同様に、生き甲斐などの価値観・死生観、グリーフケアの支援・ライフサイクルでの内的な死と再生を取り扱う「生と死の教育」で音楽の導入が奨励されていても、それに関する研究は皆無に等しい。音楽がこれまでも人の悲嘆回復や「生と死の教育」に何らかの形で介在してきたかどうか、青海島通浦（おみしま かよいうら）の鯨唄の現地調査を通して、その鯨唄の機能、そして、生と死へのかかわり、現代における鯨唄の役割などについてまとめた。音楽アーキタイプと、「呼び起こし」が音楽療法において「音楽を通して理解する」根源的な点を示していること、音楽療法におけるグリーフケア・生と死の教育での音楽の機能や役割について考察した。

The use of music in Grief Care has been suggested; however, it is expected to study the meaning, effectiveness and methods. In the area of Death Education, it is concerned to facilitate well with music but it is rarely discussed the methods or types of music. In this study is to know how music has been intervened death/life, and grief of people in Japanese society, The Kujira-uta, Whale-songs from the field-work of Kayoi shore in Yamaguchi prefecture was researched. In the consideration, music archetype, “retrieving and resonance with music”, and the significance of music of grief care and death education in the field of music therapy are mentioned.

キーワード :

グリーフケア、生と死の教育、音楽アーキタイプ、音楽療法

Grief Care, Death Education, Music Archetype, Music Therapy

【はじめに】

グリーフケアとは死別体験をした人々の悲嘆ケアを指すことが一般的に多いが、心理学・死生学において、死別のみならず、離別、愛着あるものの喪失、役割の喪失、自分自身の喪失など、あらゆる喪失体験から生じる悲嘆のことをさす。そして、悲嘆とは、嘆きと悲しみにとどまらず、主に、ショック、怒り、憤り、悔やみ、自責の念、償い、後悔など、様々な要素が入り交じった複雑な感情を意味する。このような悲嘆反応は、「普通ではない事態（喪失体験）によって引き起こる普通の反応」である。加えて、悲嘆過程とは、悲嘆感情に自分が気がつくこと、泣くこと、感情を表現すること、そして、心理的な再構築等を経て回復に至るものの最終的にはその喪失の対象が自分の内的な一部になることである。健康的な悲嘆過程を経ると精神的に健康な状態に戻るが、一方で健康的な過程をたどらず長期化する場合には精神疾患に至る場合も少なくない。グリーフケアとは、このように悲嘆体験をした人々をケアすることを言い、グリーフワークとは「喪の作業」、つまり悲嘆者が悲嘆から回復していく過程のことである。グリーフケア・グリーフワークにおいて、音楽は悲嘆者の気付きや喪失対象を記憶に残すことに効果があると言われているが、療法的な効果や音楽の手法についてまだまだ課題は多い。特に、音楽特有の臨床特性とその効果については広く議論する必要がある^{1 2 3}。

「生と死の教育」(Death Education) はデスエデュケーションとも言われることがある。この教育では、個人の生き甲斐や価値観、死生観を持つことに関して理念的・抽象的な理解を扱い、その一方で悲嘆に苦しむ人への援助、個のライフサイクルにおける「内界の死」に関する個別的・具体的な事象を扱う。「死を考えることで、よりよく生を生きる」という立場で、死生観を持つことに取り組む。例えば、ペットや身近な人の死だけではなく、心の中の喪失感「小さな死」もあり、幼児期において弟や妹の誕生等による一種の喪失体験、青年期における親友との別れ、失恋、受験の失敗、壮年期老年期になると体の機能の衰えという自分自身の機能の喪失などもそうである。ライフサイクルでは小さな死を体験してまた精神的な再生が行われることも、この教育の中に含まれている。「生と死の教育」を行う方法の一つとして、「文化や芸術を通して行う方法」があり「音楽にあらわれた死」⁴というテーマを扱う例がある。これは音楽を使用して死を一方的に教え込ませる手法ではない。あくまでも「音楽を通して、人間の死を悼み、悲しみを知り、共感し、そして、自分の内面の小さな死をどのように乗り越え、そして、自分が死をどのようにとらえていくか」を考える機会が与えられることである。それが第一に重要でだが、まだそうした視点で音楽に表れた死を扱う例はない。音楽を通して死を考える、というのは、どのようなことなのか^{5 6}。

論者は、これまで音楽療法の臨床を通じて様々な喪失体験から悲嘆に苦しむ人々が音や歌を通して悲嘆の回復過程をだどったのを目の当たりにしてきた。その中には、愛する人と死別した人もいれば、各ライフステージにおける内面の死による喪失と向き合ってきた人もいた。「グリーフケア」という言葉が社会で使われるようになるずっと以前に、日本の長い歴史の中で、地域社会で人々が支え合って悲しみを癒し合う機会に、音楽がなにかしらの形で「生と死」や「癒し」に介在していたのではないかという考えに至るようになった。そして、それが音楽でグリーフケアを行う際に、また、「生と死の教育」に音楽を取り入れる時に、生・死と悲嘆を表す音楽のアーキタイプがあるかを調査する必要があると

考えた。尚、ここで言う“音楽アーキタイプ”とは個人的・集合的・普遍的・文化的な観念・想念・感情等が含まれた根源的で原型的な音楽と論者が考え、それが、音楽療法での傾聴や共感に何らかの意味をもたらすのではないかと推測している。

そこで、まず、「鯨の死を悼む」鯨唄が現存する山口県長門市で調査を行った。2013年7月21日に開催された鯨祭りを視察した他、鯨資料館館長・鯨唄保存会会長で鯨組創業者を祖先に持つ早川家18代目当主早川良勝氏、鯨博物館の職員の方々や島民の方々への聞き取りから以下をまとめた。

【調査結果】

山口県長門市青海島通浦「通捕鯨」の鯨唄

山口県長門市青海島通地区は、1675年早川清兵衛氏が鯨組を創業して以来、明治末期まで長州捕鯨の中心地であった。沖合から鯨を網の中においこみ、鉚でいとめ、“もぐり”役が鯨が潮を吹く穴にロープを巻いて、鯨を二艘の船で“抱いて”浜へ持ち帰るという古式捕鯨を行い、船が鯨をとって帰ってくると女や子供や古老たちは、歓声をあげて出迎えたという。民家が建ち並ぶ目の前の浜に、轆轤（ろくろ）とよばれる装置で縄を巻いて鯨を波打ち際まで男たちがひきあげ、魚切（うおきり）役が大包丁で解体作業にとりかかる。18代め当主の早川氏は「他の漁をしていて鯨がたまたま捕れたのではない、通の捕鯨は生活のために捕っていた」と語る。

元鯨組網頭の一人の五世讃誉上人は、1679年より隠居先の清月庵の観音堂で、捕獲した鯨の回向を始めた。鯨の冥福を祈る鯨回向は現在でも向岸寺で継承されている。“誉”の文字を持つ戒名を鯨につけるなど、鯨に対する特別な思いがあった。鯨鯢過去帳は、全国でここでもしか存在しない。また、鯨墓が1692年に建立される。鯨墓には「南無阿弥陀仏～業尽きし有情、放つともいえども生ぜず。故に人天に宿し、同じく仏果を証せしめん⁷」と刻まれ、鯨としての生命は母鯨とともに終わり、我らの手に捉えられたが、我々の目的は、本来お前たち胎児を捕るつもりはない。むしろ海中に逃がしてやりたいのだ。しかし、汝一人を海へ放ってやっても、とても生きえないのである。どうぞ、哀れな子等よ、我々人間とともに人間世界の習慣によって念仏回向の功德を受け、諸行無常の諦観、悟りをもってくれるよという意味を持つ。捕獲した鯨を解体したときに母鯨に胎児が見つかったら、胎児を丁寧に埋葬した。現在でも、70体余の鯨の胎児が埋葬されている。鯨墓は、胎児の墓ではなく、あくまで親鯨の墓であり、その後ろに胎児が埋葬されている。国内で鯨墓や鯨の碑は90カ所近くあるが、鯨の胎児の墓は世界的に稀なものであり、「海辺の家のすぐ前で捕獲した場合もあってか、浦人たちの鯨に対する憐憫の情は特別なものがあつたことが偲ばれ⁸」、この鯨墓は1935年に国の史跡に指定されている。鯨祭りは昔から行われてきたものではない。1992年鯨墓建立300年を記念して「鯨墓建立300年鯨祭り」と称して開催されて以降、毎年7月21日に行われている。当時の古式捕鯨の様子が再現され、鯨唄が保存会のメンバーによって歌われる。



通浦の鯨墓（2013年7月21日稲葉が撮影）

通浦の鯨唄

この唄は江戸時代から明治末期まで続いた祝い歌、労働歌で1972年に長門市文化財指定をうけた。藩政時代には元旦の神社参拝時において歌われる儀式歌であったが「座の長老が歌った後でないと他のものが歌うことは許されなかったほど格式があった⁹」。当時の鯨組は、長州藩で水軍の役割を担っていたため、「一条乱れぬ統制があったほど、規律を重んじ、礼儀を尊び、勇敢果敢な反面、愛情に深く、ほ乳動物である鯨に対する哀れみ、報恩感謝の真心がこの歌の中におりこまれている¹⁰」。両手を合わせ「鯨の死を心から悼んで」歌うときも手を叩かず、揉み手をする。揉み手は、合掌のように手をたてるのではなく、合わせた手を横に寝かしてもみ手をしながら右左へと節にあわせて返す。他の地域の鯨唄では、派手な踊りや太鼓がメインとなっている鯨歌が多いが、通浦の鯨唄は、拍子をうつ程度の太鼓と歌がメインとなる。踊りは一切行わない。また、手拍子もしない。座って、揉み手をして歌うのが特徴で、他の捕鯨地域の鯨唄に同じようなものはないという。『祝え目出度』の大歌一番、『さても見事な』の大歌二番、『夢をみようよ』の歌3番の他に7曲あり、合計10曲が現存している¹¹。「鯨をとるときに、歌を歌うという悠長なことではできないと思う。きっと、鯨を待って、作業をしている間に歌ったことがあるかもしれない。だから祝い歌という方がぴったりくるのではないか」と早川氏は語る。

大歌一番は次のような歌詞である。

『祝え目出度』（大歌一番）

祝え目出度の 若松様よ
枝も栄える 葉もしげる
竹になりたや 薬師の竹に
通栄える しるしの竹よ
納屋のろくろに 綱くりかけて
大せみ 巻くのに ひまもない
子持ち巻くのに ひまもない
とかく通は 幸せじゃ*
三国一じゃ網に 今年は大漁しよ ヨカホエ

（「*～*は節が不明のため現在は歌っていない」 早川氏談）

鯨歌は今でも口承で伝えられている

早川氏たちは鯨唄愛好会を1973年に発足し、その当時の保存会の方々から「口移し」で鯨唄を教えてもらい、太鼓も歌詞の横に書いてあるものを「このように叩く」と教わったらしい。楽譜もなく歌詞のみが書かれているもので、リズムを合わせるなどということは書かれていないが、「歌と太鼓やなんかは、それなりにいくんです。そこは、一緒に息があう」（早川氏）。ただ、今の鯨唄は早川氏が教えてもらった当時とは歌い方が変わってきているという。「今は、聞かせる歌にしている」そうだ。また、大歌一番の『祝い目出度』も教えてもらった時に既に節が不明であり、今後、この節も保存会で「作って完成できる」といいます」と話す。



保存会メンバー（前列）による鯨唄。揉み手をしながら歌う。

（2013年7月21日 鯨祭りにて 稲葉が撮影）

鯨の死を悼み弔うことと感謝する態度

「歌には、実際には鯨を悼む歌詞はいっさいないが、揉み手で歌うという態度だけが残っている」。その訳は早川氏にもわからないが、「いつも鯨が血を流す状態をみているから。。」。鯨は一発ではしとめられないから、時間がかかります。そのあたりは血でいっぱいになったと思います。解体する場もそうでしょう。それが、家の前の浜で行われます。そういうのを見て、やっぱり生活のためといいながら、動物を殺すというのは複雑な思いがあったと思うのです。その複雑な思いが鯨の墓を作ったり、過去帳をつくったり、胎児を埋葬したりしたのではないのでしょうか」と当時のことを想像して語られた。胎児がいるかどうかは捕獲した鯨を切ってみないとわからなかった。また、子を伴って泳ぐ鯨は、必ず親子で活動する。一緒に泳いでいる子供をまず生け捕りにしておけば親は逃げない。そういう習性を当時の人は知っていたから子を先に捕獲し、探しにきた親を捕まえるということだった。男親は一時探す子供が見つからないとしばらくすると逃げていくが、母親は何日も子供を失ったあたりをうろうろしているようで、捕獲しやすかった。「昔の捕鯨の人はそういうのを見ているからね。哀れだ、かわいそうに、と思いながらも、自分たちが食べていかなくてはならない。たまたま鯨がとれたという訳ではなくて、生活に追われてやむなく鯨をとった。他の捕鯨の地域は、鯨以外の魚も捕れました。でも、通浦は、鯨だけで

した。生活の為に捕らなくてはならなかったから、鯨への感謝の気持ちがあったと思います」。「鯨は捕獲すると、少しずつ一軒一軒に配給されたので、ありがたいことです。それで、少し食べられますからね」。生活をするために、生きていくために、鯨がとれることは、この地域の方々にとって喜ばしいことであった。鯨の死の姿をみて、哀れさやかわいそうという気持ちを抱いているだけではなく、そこには、鯨の命に対する敬意と感謝の意味が込められていると推察できる。

胎児も埋葬するという点において、出産や胎児についてこの地域の特別な観念や想念について調べたが、当時の産婆さんはお亡くなりになって久しく、当時の出産について語る人はいなかった。島の高齢の女性10名ほどに伺ってみたが、一様に産婆さんが随分前に亡くなったこと、「昔産婆さんが家にきて産んだよ、私もそうやって生まれたしね。でも、流産とか死産とかの話はあんまり聞いたことがない」という回答がえられた。今では、島の外にある病院で出産しているということで、特に、胎児の死について特別な意見はきかれなかった。

小学生たちの授業で 鯨唄を通して命の大切さを教える

鯨唄は、現在では、鯨まつりと鯨回向で鯨唄保存会によって歌われることになっている。保存会の会長でもある早川氏は、小中学校の授業に出向いて鯨唄を教えることもある。その時には、鯨資料館で捕鯨の伝統、そして、命の大切さについても教えるという。「最終的には、命は大切、自分の命も大切だから自殺はしちゃいけないよ、と。。。いじめの話なんかも言うんじゃない」。「人間が食べている生き物はなんだって殺して食べている。今は、生き物を殺しているところは見ませんから。切り身になっているところを見ただけですからね」と。生きものの命を大切に、感謝して食べるという態度が早川さんの言葉からも伺えた。中学生から70歳代の島の方々約20名のインタビューで、全員が鯨唄は「鯨の死を弔う唄」と述べた。この島では、「弔う」という言葉が日常の言葉として馴染んでいる上、「弔う」という言葉には、「大切な心」というようなニュアンスがこめられていることが感じられた。

【考察】

まず、第一に鯨唄の社会的役割の変化について着目したい。捕鯨を行ってきた当時は、労働歌・祝い歌、としての機能があり、労働の統制をはかり、規範を伝えてきていた。例えば、「アラスカの鯨エスキモーでの歌には拍子がお互いに合ってなくてはならない¹²⁾」ように、大勢が一糸乱れず統制がとれた行動をとらねばならない民族において、歌は労働規範と社会的価値観を伝えるのは必要不可欠で 歌は生活と密着したものであり、人々の生活ぶりや価値観や考えを反映している。日本において鯨自体がエビス神として信仰され、豊穡をもたらし、神々の世界との結びつき、畏敬や崇拜という自然観とも結びついている。また、捕鯨は儀礼的な側面もあり、森田は、鯨組の生業と自然観を統合し、超自然の諸力を調整し、人間の主体力だけではなく超自然とのより良い関係で成り立つという観念が現れていると指摘している¹³⁾。捕鯨には、エビス神の自然観の他、来訪神に自己を見る祖霊信仰もみられ、鯨を人間と同じように扱う死後儀礼が生み出されてきていた。森田は、この死後儀礼には「償い」の気持ちが現れてもいると説明している¹⁴⁾。

早川氏の語りにもあったように、捕り式捕鯨では鯨をしとめるまでに時間がかかる。「鯨からは血潮が吹き出し、大きな声を放って荒狂う¹⁵」姿を見て、鯨組は「苦痛」「悲嘆」ととらえていたが、その気持ちや鯨をないがしろにはしなかった。通浦の鯨歌では、死んだ鯨に対する思い・胎児に対する哀れみの気持ちと生計のために殺生しなくてはならないことの二律背反の思いが、鯨唄に組み込まれている。通の人々は、鯨がしとめられるまでに大量の血を流している様子を見て、諸手をあげて喜んでおれない、感謝の気持ちと哀れみを表現したのだろう。そのような鯨の死に対する感謝や敬意が「弔うという態度」でこの歌を通して歌いづがれているのだ。悲しみだけを表現する弔いではない。鯨回向や、胎児を埋葬するということにその態度が表れている。そればかりでなく、通浦では、鯨に人間よりも格が上の戒名をつけるなど、感謝よりも、崇拝という気持ちが込められていたと考えられる。

次に、唄に表現されている内容と形態について考えたい。実際に音楽は社会的タブーを表現しやすくするが、通の鯨唄には二律背反な側面にかかわらず、歌詞に死を悼むことが直接的に入っていないというのは、祝い唄に「死」に関する言葉を入れるのをためらっていたからではないだろうか。直接「哀れみ」や「死」という言葉を歌に出すには抵抗があったり、あるいは、祝い歌として「死」という言葉を入れるのはふさわしくないという判断だったのかもしれない。以前、論者が流産死産を経験した女性のためのグループ音楽療法で唄作りを行ったときに、「歌詞に直接的な言葉を入れるのはやめて、やんわりという感じの表現にしませんか？」というある女性の提案に全員が賛同していたことがあった。音楽は言葉にメロディをつけてその思いを表現する場合もあるが、必ずしもそうではないことをこの民謡は意味している。通浦の鯨唄には踊りがなく、手を叩かない。歌と揉み手そして、拍子をとる程度の太鼓があるだけだ。歌には喜びが、そして、揉み手には亡くなった悲しみに限らず、「感謝」「崇拝」の想いがこめられ弔われて、二つの相反する想念が表現されていると考えられる。

現代では、通の鯨唄に労働歌・祝い歌という機能は消えたが、「命を大切にする、生き物に感謝していただく」という社会規範あるいは概念を教える役目と変化し、島民に受け継がれている。「通の人間になるには通の鯨唄を知る」といっても過言でないだろう。インタビューに応じてくださった方の中には、島に嫁いでくるまでは知らなかったが、子供たちが小学校で鯨唄を習ってきたので知ったという女性が複数いた。鯨唄を「命の大切さを伝える唄」という風にとらえていた。早川氏は、小学生には鯨唄を教えるだけでなく、島の捕鯨の歴史や命の大切さを話す活動をされいている。まさに、これは、島民としての文化や伝統や価値観を伝えるということに付け加えて、鯨唄を通して「生と死を考える」という機会を与えている。

第三に、鯨唄の時間的な連続性について、文化的観念の継承と「生と死」の関係について推論したい。この「死を考える機会」は現代の「生と死の教育」にはかせないものである。情報社会では携帯のメールですぐに返信しなくてはならないような状況が免れず、自分の気持ちを振り返ってみたり、状況をよく考えてみたり、自分がある事象や物事に対する観念を確かめてみることや考え直すというようなことができなくなっている。家での出産や看取りがほとんどなくなった現代では生と死に接することも少なくなりまた死はタブーとされているため、ゆっくりと生と死について自分の考えを内省することがほとんど

ないだろう。自分が生と死をどうとらえているか、つまり、死生観を持つということができなくなっている。通の鯨唄は、鯨まつりや鯨回向で歌われるようになり、小学生が学校で習うたびに、島民の人々に「生と死についてふと思い考える」という機会を与えている。つまり鯨唄は音楽による「生と死の準備教育」の原型、音楽アーキタイプともいえるだろう。

最後に、音楽療法においてこの音楽アーキタイプがどのような機能を果たすことになるのか考えたい。直接的な言葉がなくても、音楽が人の感情を想起させ移入させる。音楽は共通のコードを運ぶ。田村は『鳥になった少年』を例にあげ、「音楽は“呼び起こし”によって共感を導きだすための磁場を設定する」と述べている。『鳥になった少年』とはカルリ族の共通基盤となる「ムクになった少年」神話で、ザリガニをわけてもらえず見捨てられて鳥になった、という小さい男の子の話である。カルリ族にとって「鳥になった」ということは「死んでしまった」ということを意味する。この部族では、孤立する、見捨てられる、というのが一番不幸なこととして捉えられ、その通念がこの神話をもとに伝えられる¹⁶。この神話は、「空腹・孤立・見捨てられ・死というテーマが一連となり、子供にとって死や孤独が想像できなくても、ザリガニをわけてもらえないことや空腹で見捨てられることは子供たちの生活のまさに中心で直接的な情動を思いおこすというように子供から大人まで村全体で疎外の苦しみを共有する¹⁷」。ただ、伝えられるのではなく演者がその悲話を語り歌い、聞いている同部族の仲間の内界の奥深くにふれ悲しみと涙をさそう。「音楽は意味世界を叙述するのではない、音楽においては、むしろ発信された方の・ある感情であれ、気分であれ、ある魂の状態であれ・が、他者の中で呼び起こされる」からで「概念的な理解が知識と照合されるのに対し、音楽的な理解は同じ感情を引き出す¹⁸」ためだ。

「鳥になった少年」のカルリ族は、鳥のサイクルで暮らし鳥とともに生活し過ごし続ける。鳥とともに生きる生活が、鳥にカルリ族の通念を具象化し孤立の悲しさを通念を音楽のコードとして表現している。通の島民も同じことがいえるだろう。鯨の生き死にを具象化して歌と態度になぞらえて「共感を呼び起こす磁場¹⁹」を作っていたに違いない。通の鯨唄は「鯨の死を悲しむ」というよりは、鯨の命への感謝や敬意が弔うという思いを音楽の磁場の中で伝えていったのだろう。それだけではない。胎児までも埋葬するというのは、親が子を思う気持ち、親は子を大切にするという態度がそこに投影されているといえる。胎児を埋葬するという民俗的な理由の確証はつかめなかったが、「子供を、赤ちゃんを大切にするのは当たり前」という観念を持っていたから、胎児のことも弔うという考えに至ったのだろう。田村の「“悲しみ”を描写する音楽があり、どんな聴き手にもそこに悲しみを認めるというのではない、それを悲しみであると読むためのコードが必要」と言うように、島民の規範となるものがそこに現れ「強い絆の感情が呼び起こされ（中略）社会を成り立たせている集団への帰依」の精神を呼び起こし²⁰」ているからだ。

また、音楽療法のグリーフケアについてこのように考察できる。田村は「呼び起こすもべきものがわたしのなかにはない時にはその限りではないが」と前置きし「音楽の波長がわたしのなかにあるものを共振させた時、私のなかで同じ波動が生じる。例えば、ある魂の状態が“説明”されるのではなく、“呼び起こし”がなされる。呼び起こしは同化の作業である²¹」とも述べている。このことは、音楽療法において、音楽の機能や役割について

根源的なことを示唆している。グリーフケアにかかわらず、音楽療法士が傾聴する「音楽を通して対象者の気持ちを聴く」という行為は、まさにこのことだ。グリーフケアにおいて、傾聴するのはその喪失体験の事実ではなく、どんな苦しみをかかえているかを知り、一緒に悲嘆者が回復していくようにグリーフワークと一緒に歩むことである。それには、その人の喪失体験と悲嘆感情を“わかる”あるいは“わかりたいという気持ちで聞く、または教えてもらう”ということである。喪失の大きさはその事態の重大さや状況によることもあるが、喪失体験の重さは個別でその感情の持ち方は様々である。ケアをする側も、全く同じ経験をしたことがある人ならともかく、そうでない場合には、悲嘆経験者の気持ちを想像することは非常に困難で、自分の喪失体験から引き寄せてその方の感情を想像して一緒に悲しむ、ということしかできない。音楽を通してグリーフケアを行うには、この呼び起こしが必要であり、悲嘆者が音楽を通じてどのような悲嘆のコードを伝えようとしているのかに耳を傾け、同化することではないだろうか。反対に、悲嘆者の悲嘆感情にどっぷりとつかうための、音楽の呼び起こしの磁場を作ることも音楽療法には必要とされるだろう。

このことは、グリーフケアだけに限らず音楽を通した「生と死の教育」でも、音楽の根源的な役割を示す。「生と死の教育」は、人の生き死にがどうだという事象を知ることだけではない。通浦の鯨唄の場合でも「命を大切にしろ」と言われても「死んでしまった胎児がかわいそうだ」と言われても、ピンとくるかこないかは、個人的な経験と想像力によるものが大きい。「音楽の呼び起こしにおいては、コードが必要であり、それは後天的に体験され、積み重ねられるものである。そのために、カルリの神話では、子供から理解できる話から入り、一層抽象的な段階へと構成されている²²⁾」ように、生と死の教育では、そして、理解度や経験値の段階に応じて積み重ねていくことで、自分の経験値を引き出して“わかる”こと、そして、生と死に対する価値観や死生観への経験値を増やしていくことで、さらに考えを深めていくことになる。このように考えると、通の鯨唄は、「喜び」「生・死」「弔う」という想念がコードとして根底にあると考えられる一つの音楽アーキタイプといえる。また、この「喜び」「生・死」「弔う」から移行し「命を大切にする」「死を弔う、悼む」という変容し、世代世代やそれぞれの体験値において奥深くで受け取ることとなるのだろう。

音楽自体もこうやって時代を経て人々を介していくことで小さな死を繰り返し変容していくのではないだろうか。通の鯨唄には、もう節回しがわからないところや、10曲の鯨唄の中にまったく歌い方がわからないものもあるという。早川氏をはじめとする保存会や島のみなさんが眠っている鯨唄に節をつけて蘇らせ、鯨唄は新しく生まれ変わっていくのだろう。そして、鯨唄は歌い継がれていくことで、その機能や役割を変容させていく。これもまた、音楽自体の死と再生といえるのではないだろうか。

【おわりに】

現地での調査期間が短く、また、現存する資料も少ないため、通の捕鯨や鯨唄について広く調べられていないことには課題が残っている。通の島の方々の宗教観や死生観、通地区の民謡・民話などについても考察していく必要があるだろう。一般的に、民俗音楽学において調査した歌を採譜することは必然で、音楽療法分野においても対象者の表現する音

楽を楽譜におこすことは大切である。通の歌はあくまで口承で歌い継がれている。ここに、採譜した鯨唄を掲載することも考慮したが、その結果、口承は口承として、現在も歌い継がれ変容していつている鯨唄をここに掲載することはせず、音楽を感じ音楽によって運ばれるコードを心の中でうけとるということを重視することにした。また、本論は捕鯨についての是非を焦点にしてはおらず、あくまでも鯨唄が社会的にどのような役割をになっているかという点から、音楽のグリーフケアについて、また、生と死の教育における音楽の使用についてを考察している。しかしながら、通の方々の、鯨に対する紳士で、やさしく、思いやりの深い考えと態度には、ある一つの日本人の死生観があるといえ、今回の調査で鯨唄という音楽を通して捕鯨に関することについて考えさせられることが多かった。まさに、論者もその点では、鯨唄の“コード”をそのようにうけとめ、また、話をさせていただくことで音楽を通して知ること、そして、鯨唄という音楽を通して生と死について考える機会をいただいたといえよう。

通浦の鯨唄に限らず、民謡にも供養、子別れ、死別のつらさを歌うような民謡、弔いや供養をする民俗芸能があるが、悲嘆の音楽アーキタイプの調査を続け、音楽でのグリーフケアと生と死の教育に役立てたい。受け継がれている文化もあれば、新しく作られた価値観もあり、民謡や伝統芸能に関わらず、様々なジャンルの「生と死と悲しみ」の音楽のアーキタイプにも着目したい。

【謝辞】

18代目当主早川良勝氏をはじめとする鯨唄保存会の皆様、鯨資料館の職員のみなさま、通でインタビューに応じてくださった島民の皆様、捕鯨や鯨について素人で門外漢の私を快く受け入れてくださり、また、時間をくださったことに心から感謝しております。田村和紀夫先生、青木聡先生、平山正実先生に心からお礼申し上げます。

【参考・引用文献】

- ¹ 平山正実 『死生学とはなにか』 日本評論社、1991年 21-45頁
- ² ロバート ニーメイヤ 『大切なものを失ったあなたに ― 喪失を乗り越えるためのガイド』 春秋社 2006年 25-82頁
- ³ ケイ ギルバート 『悲しみから思い出に 大切な人を亡くした心の痛みを乗り越えるために』 『From Grief to Memories. A Workbook on Life's Significant Losses』 大石佳能子監訳 日本医療企画 2005年 97頁¹
- ⁴ 樋口和彦・平山正実編、『生と死の教育―デス・エデュケーションのすすめ』 創元社、1985年 161-169頁
- ⁵ 平山正実 前掲書 275-307頁
- ⁶ アルフォンス デーケン 『生と死の教育』 岩波書店 2001年
- ⁷ 通鯨唄保存会 『かよい鯨唄』 「鯨墓の由来」
- ⁸ 河野良輔 前掲書 84頁
- ⁹ 河野良輔 前掲書 同頁
- ¹⁰ 通鯨唄保存会 『かよい鯨唄』 「はしがき」

- ¹¹ 通鯨唄保存会 『かよい鯨唄』『はしがき』
- ¹² 小泉文夫、『音楽の根源にあるもの』 耕文社 1977年 168-169頁
- ¹³ 森田勝昭、『鯨と捕鯨の文化史』 名古屋大学出版会 1994年 169頁
- ¹⁴ 森田勝昭 前掲書 172頁
- ¹⁵ 森田勝昭 前掲書 171頁
- ¹⁶ スティーブンフェルド 『鳥になった少年 カルリ社会における音・神話・象徴』「Sound and Sentiment: Birds, Weeping, Poetics, and songs in Kaluli, 1982」 山口修・山田陽一・ト田隆嗣・藤田隆則訳 平凡社 1988年
- ¹⁷ 田村和紀夫 『音楽とは何か ミューズの扉を開く七つの鍵』 講談社 2012年 201頁
- ¹⁸ 田村和紀夫 前掲書 194頁
- ¹⁹ 田村和紀夫 前掲書 193頁
- ²⁰ 田村和紀夫 前掲書 202頁
- ²¹ 田村和紀夫 前掲書 202頁¹
- ²² 田村和紀夫 前掲書 201頁